［二〇〇七年度大会パネルセッション］

天台宗談義所における知の形成——柏原談義所を中心に——

曽根原 理
松本 公一
大島 薫

一　概要

日本中世に、各地（特に東日本）で発達した地方の学問寺院を、当時の用語で「談義所」と称する。柏原談義所（＝寂照山円乗寺成菩提院）は、初代住持の貞舜（一三四九～一四二二）から三代の春海（一四〇三？～八八？）にかけて学問寺院として発展し、天台宗を代表する談義所となった。

成菩提院の研究は、第五十九世住職でもあった尾上寛仲氏（一九一二～八四）によって進められ、談義所の活動に関する多くの事実が明らかになった。しかし尾上氏の研究活動は、同寺所蔵史料の悉皆調査には至らなかった。一九九四年以降、福田榮次郎氏（当時明治大学教授）を中心とする調査団によって、歴史資料の調査が実施され、特に旧坂田郡の中世史や成菩提院の寺内秩序などに関する解明が進められた。その成果は、『中世・近世地方寺社史料の収集と史料学的研究』（平成六～八年度科学研究費補助金・一般研究B報告書、代表福田榮次郎、一九九八年）をはじめ、福田氏、湯浅治久氏、鎌倉佐保氏など調査団に加わっていた各氏の論考に見ることができる。

やや遅れて、典籍・聖教類を対象とする調査も開始された。今回の報告者三名は、十年以上続く成菩提院の聖教調査に従事し、従来知られていなかった湖東地域周辺の学問状況を明らかにしつつある（曽根原「中世談義所寺院の知的交

流と言説形成」『日本歴史』六九二、二〇〇六年や、『仏教文学』三〇号、同年の所収各論考など参照）。

今回のパネルセッションでは、今までの調査の蓄積を踏まえ、柏原談義所に伝来した聖教や関連資料を扱い、宗派や地域にとらわれない中世の知のあり方のさらなる検討を目的として、三本の報告を設けた。

報告一　曽根原理（東北大学）「柏原談義所の成立をめぐって」

報告二　松本公一（池坊短期大学）「談義所と本草学」

報告三　大島薫（関西大学）「湖東地域における真言教学と天台教学」

報告時間は各二十分とし、最後に全体討論の時間を三十分設けた。なお全体にわたり、司会は佐藤眞人（北九州市立大学）が担当した。

本記録のうち、「一　概要」と「三　質疑など」は曽根原が執筆し佐藤が補訂した。二の報告要旨は、各報告者が執筆した。

二―一　曽根原報告要旨

談義所は、中世後期の仏教を研究する上で、看過できない位置を占めていると考えられる。古代から中世にかけての仏教は、基本的に畿内（ないし鎌倉）の大寺院において生成した「正統」教学を相伝することが高い価値を持っていた。その傾向自体は後々まで続く。しかし中世後期になると、それまでの「唯授一人」の口伝主義と異質な方向性が広がりを見せた。各地に成立した談義所においては、各系統の教学を①広く集め、②「客観的」に比較・整理し、さらに各説を③大部の注釈書や聞書・抄物などに編纂し、④流通させるといった動向が見られるようになる。こうした動きは当時の仏教に、独自の性格を付与したと考えられないだろうか。

十四世紀に柏原談義所を開いた貞舜が、南北朝時代の動乱の中で成長し、各種の教学を相承していったことについては、以前調査したことがある。今回新たに注目したいのは、彼の学習過程で、どのような教えが誰からどのような形で流入していったかということである。貞舜の実例を調査することで、その時期の〈知の形成〉について、実態を把握し歴史的性格を分析することを目指した。その結果、貞舜の師である貞祐、その師である貞済は、みな柏尾寺談義所（美濃国養老郡）に関わる学僧であったこと、貞済が学僧として活動していた様子の一端が成菩提院や身延文庫に伝わる聖教類から窺えること、が確認できた。貞済や貞祐は、叡山記家に属した光宗（一二七六～一三七〇）の流れを

汲む学僧である。記家の学僧に見られた学問重視の方向性と、貞祐から貞舜に伝わった類聚の営みをあわせて考えるなら、ちょうど十四世紀頃に、学問重視の思想が相伝のあり方として具現したと把握されるのではないだろうか。

二―二　松本報告要旨

『阿娑縛抄』は、一百三十三巻からなる、天台僧尊澄・承澄らにより編集されたもので諸尊法を中心として中世の天台密教を中心とした知の大成を示すものである。

ところが、真言宗の『覚禅抄』などと比較すると中世にさかのぼる古い写本は少なく、近世の写本のみ残っている巻が多い。『阿娑縛抄』の中世写本としては、京都曼殊院・鎌倉宝戒寺・滋賀成菩提院・滋賀叡山文庫、未見ではあるが岐阜華厳寺などが知られるのみで、これらの写本も全ての巻を完備しているわけではない。現在、調査に関わっている滋賀成菩提院本においては、「請雨」「香薬下」の二本が新たに確認された。この二巻とも、活字本の『大日本仏教全書』『大正新修大蔵経』のいずれも欠本となっており本文も伝わらない。

本報告では「香薬下」をとりあげ、その概要と、研究の展望を述べた。まず、日本における本草学研究は、近世以降が中心で、日本の古代・中世においては、それほど研究蓄積がないこと、そして古代・中世では天台・真言で実際に修法などに使用された「香薬」にかかわるテキストが存在し、「仏教本草学」と称するテーマ設定が可能であることなどを提起した。

実際に、『香字抄』・『香要抄』・『香薬抄』・『薬種抄』などが『大正新修大蔵経』や『続群書類従』などに収録されている。ところがこれらはいずれも高山寺・石山寺・高野山などに伝来し、真言宗のものである。ここに紹介する、『阿娑縛抄』の「香薬」は、上、下でそれぞれ一巻をなし、上は『大正新修大蔵経』図像第十一に収められた猪熊信男蔵本『香薬抄』にあたる。その奥書に

弘安元年三月八日書畢如此抄書／数巻皆為後覚也而賞玩之人／定希於麟角歟数奇之源哀也／三部都法苾蒭前僧正承澄

建武四年十一月上旬之比小川殿／御真筆校合之本令書写同／校点了　禅澄

とみえ、『阿娑縛抄』の一巻とみてよい。滋賀成菩提院本は巻頭は失われているものの、奥書に、

建武四年五月五日書写之　仲賢

同六月十日以小川殿御真筆之／御本一校了　豪鎮

とあり、また同寺に伝来する他の『阿娑縛抄』と料紙、形

態が共通するので、『阿娑縛抄』の「香薬」下と判断できる。

「香薬」上には六十種、下には名称の残るもので五十一種の香薬が確認できる。また、それぞれの香薬について、中国の本草書を引用して説明するという、他の類書と同様の体裁をとっている。また、真言宗のものと比較すると、同じものでも説明の引用書が違ったり、あるいは文章の省略があったりとその引用態度は異なっている。

ある事柄を様々な文献で説明あるいは注釈をつけるというのは、中世における知のありかたの典型的な一形態であるが、今回紹介した『阿娑縛抄』の「香薬」については、

①『阿娑縛抄』の諸尊法で使用されている香薬の品目
②真言宗側の香薬の典籍との比較
③引用される中国本草書

などについて基礎的な分析が必要であり、いわゆる仏教本草学の具体相を明らかにし、寺院における学問の一ジャンルとして位置づけることが今後の課題である。

二―三　大島報告要旨

東寺観智院の第一世「杲宝」の弟子にあたる「仁宝」が編纂した『寡聞書』（『天台宗法門名目私抄』のこと。延文三年十一月二十五日より延文四年三月十八日にかけての記録）は「江州西明寺」で行われた談義を記録したものである。「西明寺」は、現在も湖東三山として著名な天台寺院であり、本書には、この談義に集った学侶も列挙されるが、彼らは「白済寺（百済寺であろう）」ほか「延文年間に論義のはなはだ盛んに行われた所」と指摘される寺院に止住する者たちであった（真鍋俊照氏「東密所伝「最澄」本系統等の伝本――杲宝、賢宝、仁宝の周辺、とくに延文年間」、天台学会編『伝教大師研究』一九七三年所収）。が、本書において興味深いのは、東寺観智院が創建されたのが、この時期に当たることである。「仁宝」は、湖東の天台寺院に赴き、観智院に集積すべく、天台教学を求めたわけである。

東寺観智院金剛蔵には『天台四教五時名目幷八宗』（尾題「八宗名目」、奥書「本云、文和元年壬辰十一月二十三被書写了于時、延文六年辛丑二月四日書写了」）が所蔵されるほか、「仁宝」と同じく「杲宝」の弟子で観智院二代となる「賢宝」が、湖東において書写した天台聖教が少なからず所蔵されている。この時期、湖東における天台寺院、具体的には「談義所」を称された寺院が、宗派を超えて研鑽を重ねるべく、学侶の集う場として機能していたことを指摘できるのである。観智院の第一世「杲宝」や二世「賢宝」が貴種でなかったことも周知である。彼らが天台教学の集積を図

るべく「談義所」を訪れたというのも、「談義所」に集う者たちを考えるに、偶然ではないだろう。

ところで「仁宝」や「賢宝」が活躍したのと、ほぼ同時期に活躍したのが「成菩提院」の初代と数えられる「貞舜」である。「貞舜」もまた貴種でない。「柏原談義所」として知られた「成菩提院」に、多くの学侶が集ったことは間違いない。その多くは、今日、聖教に名前を伝えるのみの者たち、さらにいえば名前さえ伝えられていない者たちである。彼らは、どういった研鑽過程において伝授されるべき教学を求めて「談義所」を訪れたのだろう。古代とは異なる知識需要が展開した時代である。「談義所」の実態と役割を明らかにすることは、ある時期の、日本仏教の在り方を明らかにするのみではないだろう。筆者は、人々の知的要求が「直談」と称された営みを形成したことを論じたことがある（拙稿「直談再考」『日本仏教綜合研究』三、二〇〇五年五月）。「談義所」を訪れた者たちにも、同様の日本人の精神史をかいま見ることができるのではないかと考えている。

三　質疑など

全体討論の中で出た質問としては、①談義所は天台宗以外にもあるのか、あるとしたら他宗派との異同はどうなのか、②談義所において密教と顕教はどう関係するのか、③近江国湖東地域から美濃国養老地域にかけての地域性をどう考えるか、などがあった。①については、談義所研究は天台宗が一番進んでいるが、真言・日蓮・浄土などの宗派においても近年成果が生まれつつある、②については談義所は基本的に顕教だが、成菩提院や密蔵院（愛知県）のような灌頂道場を兼ねたものもあり、顕密の関係はなお今後の課題である、③については、東国への通路であり不破関を挟む地理的条件が関与している可能性がある、といった回答がなされた。さらに会場から今回の報告について、天台・真言・日蓮など諸宗派の交流の様子が窺え中世の時代性が感じられた、原史料を扱うことで活字史料では分からない情報が示され興味深かった、などの感想が述べられた。

（東北大学助教）
（池坊短期大学准教授）
（関西大学教授）